

【書評】

星野彰男『アダム・スミスの動態理論』

関東学院大学出版会, 2018年, x+268頁

著者は、これまで『アダム・スミスの経済思想—付加価値論と「見えざる手」』（2002）、『アダム・スミスの経済理論』（2010）を刊行しているが（これらについては本誌43号と53巻2号に新村聡の書評がある）、本書は、三部作の掉尾を飾るものである。序論と11の章および書評等10の補論から構成されている。

一言で本書を述べるならば、以下のように概括できるだろう。スミス労働価値論の再検討を通じて、スミス経済理論を動態論として掘り直し、その際、才能・知性・技術等々を交換価値から除外してしまうリカードウ—マルクスの伝統的な経済学史パラダイムを脱し、「スミス理論中に暗黙裏に内包されている労働能力改良→価値増加の論理」（35）を読み取ることによって、今日のイノベーションや環境問題、さらには格差問題にも接近しようとする、意欲的な著述、と。

本書を構成する理論的諸結節は、以下のようである。①スミスの“労働価値論”は、「生産力価値説」と名づけられるべきものであり、「労働生産力の増進」が「生産物量」だけでなく、「その増加率を上回らない限りで価値をも増加させる」と主張するものであった（151, 75, 89）。つまり、スミスの「労働の生産的力」は、②一方で、ヒュームの「勤労の増進」概念を継承して（68, 51, 123, 181）、人間の才能も含む「動態的な含意」をもつものであり（155, 47, 70）、また、③他方で、「価値を生産する」ものであるが、その場合の「価値」とは「支配する労働（力）」を前提するものであり、「労働」への「支配」力の「度合」を表す「代替概念」として導入されたもので

ある（カントの「度合」概念を参照指示）（122, 86）。したがって、④スミスの“労働価値論”は、「労働量に比例する付加価値体系」と述べることができ、リカードウの「労働量（過去労働を含む）に比例する利潤体系」とは区別されなければならない（163）。

本書のこのような主張は、理論書という性格上、当然、反論を喚起する。(a)労働が富だけでなく生産物の価値をも増加させるという本書の「生産力価値説」は、『国富論』第2篇第3章の文言のみを根拠とするものであり（cf. 75, 90）、論拠としては薄弱ではないか。(b)著者は、『国富論』第1篇第1章の一文（WN II 9/—33）を根拠にして、「科学者 philosopher」は「もっともかけ離れていて似たところがない諸対象の諸力（powers）を結合すること」ができる人たちであると語り、この「結合」を「未開国王」と「文明農夫」に適用して「これらの地域を超えた人類史としての富の成長を究明しようとした」と述べるが（59）、これはスミスの2つの「社会段階論」の解釈としては妥当であろうか。(c)「生産力価値説」は、「富」（生産力）と「価値」を峻別したリカードウに対して、いわば両者を合体させるわけだが、そのばあいの「価格」と「価値」の理論的位置づけはどうか。また、(d)農業の雇用労働量が工業よりも多ければ付加価値量も多くなるという理論帰結から、スミスにおける「絶対地代」認識の存在が主張されるけれども（176, 106）、範疇としての「絶対地代」（「独占地代」との区別）という観点から考えるとき、これは、マルクスの『1861—63草稿』のミス・リーディングとは言えないか、等々である。出所を明記し

たテキスト解釈という点で、本書は、スミスを中心とする古典を再読し実のある議論をする上で、恰好の論争書となっている。

本書の今日性に関しても、多くの反論が生じうる。著者は「もしこのスミス説への理解が深まり、才能価値への評価と配分がもっと高まれば、どういう効果が生ずるだろうか？ さしあたり想定できることは、世間的に才能志向がより高まり、その傍ら、資本利潤への配分がその分だけ抑制され、過剰資本化の傾向が多少は緩和されることになろう。また、中間階級の層が厚くなり、極端な金融資本主義への偏向が多少とも市民社会の方向に是正されよう」(72)、と述べている。これに対しては、(a)「熟練・技能・判断力」(才能)とともに富と価値が歴史的に増進してきたと言うのは理解できるとしても、それがストレートに安定的な市民社会に結びついていくと主張するのは、例えば、才能が社会差別的原因にもなりうる現状を考えるならば、あまりにも楽観的ではないか。(b) 例えば、福祉・介護労働のように、生産効率でなく、逆に、いかに人手をかけるかも一指標となりつつある現代の労働評価の状況は、どう理論化するのか、(c) 資本主義における労働は「生産的労働」か「不生産的労働」かの一元的分類に収斂されてしまいがちだが、スミスには「有用労働」という概念もあり、これについて本書はどう捉えるか、等々の疑問が寄せられうる。これらは、「生産」と「分配」が浸潤し合って展開する現代経済社会が発出する難問であるが、スミスの生産力価値説が外破的でなく内生的な経済発展論であるとする本書の基本的主張の射程の範囲内にあるようにも思え

る。この点でも、問題触発的な一書と言ってよいだろう。

スミスの原典に丹念に当たり議論を組み立てていく本書の叙述からは多くのことを学ぶことができた。'employ' と 'bestow' に関する議論(138)は、リカードウの『原理』3版第1章第4節見出し文の読解にとって示唆的であるし、'occasion' という語が「再生産」(148)あるいは「循環・流過程の一環」(103)に関連づけて用いられているという著者の指摘も、動詞だけでなく名詞としても使用されるこの語をどう扱うかについて、大きなヒントを与えてくれる。また、植民地貿易の独占に関して指摘された 'advantage' についても(16-17)、スミスがいわばマクロ的に用いているこの語を、リカードウはミクロ的に用いているのかもしれないと、「比較生産費説」とも関連させて考える糸口を与えられた。

かつて高島善哉は、敗戦直後に、“労働価値論”についてこう問題提起した。「リカードにおいては生産力概念は初めから与えられたものとして問題にさえならなかった。…労働価値論は崩壊の一路を辿ったのであるが、このことは、労働価値論を単に労働価値の理論として、生産力の理論から切り離して取扱うことがいかに危険であり、誤謬であるかを示すものであると言えるであろう」(『アダム・スミスの市民社会体系』1947年)。本書は、この問題提起を受け止め(85)、その後の内田義彦等の議論を追いつつ(157)、真摯に応答したものである。一朝一夕では叶わぬ学問的営為の重さに、改めて頭をたれる思いである。(佐藤滋正：尾道市立大学名誉教授)